

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	鹿嶋社記事 : 雑録
Author(s)	東籬園迂生
Citation	龍南會雜誌, 6 3 : 3 5 - 4 1
Issue date	1898-02-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5043
Right	

鹿嶋社記事

東籬園迂生

愚往年某史學會の員に列り猥に先輩の眷顧を荷ひ入ては咳唾の音を聞き出ては地方名士の知を辱ふし遍歴の便を得所在舊蹟を探り爲に智田を開發之阿蒙の愚を啓きたること蓋し淺少に非ず不肖の某會に囑謝するや深し當時會長の命を畏み正に復命する處あらんとし強て禿穎を叱し草稿に従事せしこと日ありしに偶々時運の推移により身は飄々東西の人と爲り落魄遂に安居を得ず爾來風塵の裡に居諸を送るの止むべからざるに至り稿を終へずして荏苒今に及べり不肖某會に負ふの罪や實に大なり厲者故あつて蠶底を開き舊稿を得座るに當時を憶ふて息まざるの餘り復た案牘の側ら蒐收清寫の勞を取り私に考案を附して僅に前志を成すを得たり偶々龍南誌六十三號發刊に際し友人某氏之を轉載せんことを慫慂せらる不肖一再之を謝辞す然れども是より先き氏と他事に關して何かな寄書の約あり今にして履行せずんば有信の義を奈何せんと三たびに及んで遂に本誌の餘白を汚すに至れり恐懼措くなま獨り文辭蕪雜の故のみにあらず斯人にあらずして斯事を議す所謂釋迦に說法の類なればなり然れども記事概ね大官司の文書に係はり一毫も猥に私見を交へず讀者幸に諒する處あれば可なり

抑も吾朝は神國として宗廟社稷殆んど三千餘座の多きに及ぶと雖ども之を區別えて大中小の三社となすとかや而して伊勢の太廟は言はずもがな河内平岡に鎮座まします神及び常陸鹿嶋に於ける神宮等は春日社に屬し大社に列す乃ち前者は天兒屋根命を祭り後者は武甕槌命を祭る聞く春日社の諸神は滿月圓明の如來久遠成道の光を和け法雲等覺の薩埵内證本地の影をかくま専ら一朝の忠神として鎮に四海の安寧を守り給ふと遮莫れ御裳濯河の流千秋のかけを浮へて九五の位れたやかに御坐三山の

嵐萬歳の名をよはひて博陸のよせおもし是こそ神國のいみしき驗にては侍れ

今春日社中殊に鹿嶋に付て少しく其縁起祭式等を見聞し且つ一二宮司の記録を得たれば左に之を録して史家の資に供せんと欲す若誤謬あらば幸に示教を吝じ勿れ

鹿嶋神宮は常陸鹿嶋町大字宮中字鹿嶋山にあり鹿嶋山一名を三笠山といふ松杉鬱蒼として天に參し幽遐廖廓飛鳥を斷つ傳へ云ふ其創建は神武帝の時にありと鹿嶋神宮記
鹿嶋社例傳記延喜の頃名神大社たり(延喜式)明

治四年辛未五月官幣大社に列せられ境内參萬千八百四拾坪(境内舊は貳拾壹萬九千貳百五拾九坪)なりしを明治四年七月上地同九年四月其境内外の區劃を立つ今の境内は當時の定むる所

案史に曰く高皇生靈尊天照大御神高天原にあり天神豐葦原瑞穗國を皇孫瓊々杵尊に授け以て其國の主となさんと欲す時に國內妖神多く擾亂止まず天神乃ち八百萬神を天安河原に會し之を諮詢す其衆議の決する處により天菩比命を遣はせしに命大國主神に媚び三年を経るも還り來らず大國主神は素盞鳴命の子出雲國伊邪佐の小濱に居るものなり因て亦天若日子を遣る日子も亦大國主神の女下照姬を娶り八年に至るまで復命せず是に於て天神更に詔を下し謀りけるに皆曰く武甕槌神可なりと乃ち武甕槌神を遣り配するに天鳥船神を以てす二神出雲國に降り十握劍を抜き地に植ゑて其鋒端に据し大國主神に問ふて曰く天神皇孫を降し此國に君臨せしめんと欲す故に先づ我二神を遣し馳除平安せしめんとす何如と大國主神對て曰當に我子事代主神に問ひ然後報すべきなり乃ち使者をやる是時事代主遊行して出雲國三穗崎にあり乃ち使者に答へて曰く今天神此借問の敕あり我父當に避け去るべし吾亦違ふ可からずと使者還り報ず大國主神則ち其子の辭を以て二神に申す二神曰く尙謀るべきものありや言未だ終らざるに次子健御名方神大石を掀ち來り呼んで曰く誰か敢て吾國に來るもの

を請ふ力を角せんと武甕槌神大に怒り其手を取り之を數歩の外に投ず御名方神恐れて逃げ去る武甕槌神追て科野之國洲羽海に至る御名方神叩頭謝して曰く唯命之れ従はんと武甕槌神還りて之を其父大國主神に告ぐ大國主神曰く我二子已に避け去る吾又當に避くべしと乃ち國を平げし時杖つく所の廣予を二神に授けて曰く吾此予を以て卒に治功あり天孫若し此予を用ゐ國を治めば必ず當に平安なるべし今吾當に隠れんとす言訖りて遂に隠る二神乃ち諸の順はざる鬼神等を誅し天に昇りて復命す是に於て皇孫瓊々杵尊天より降りて日向國高千穗峯に居る武甕槌神饗速日神の孫熾速日神の子なり

古事記日本書記
古語拾遺

苗裔頗る多し大抵磐城陸前の二國に祭れり

三代實錄

造營 神武帝紀元二年始めて神宮を奉祀造營せられたること古記に見ゆ（風土記に淡海大津朝初

遣使人造神之宮自爾已來修理不絶と然れども神宮造營の事已に此時以前にあり且神戸を置れたることあれば是れ始めて造營せしに非ずして修理を加へたるなるべし）造營の年期は大寶元年に於て始て

廿年と定められたるか神宮傳記弘仁三年に至り從前の例を廢せ正殿のみは廿年毎に改造することゝし他

は營繕のみに止められたり日本逸史延喜式云凡諸國神社隨破隨修理但攝津國往吉下總國香取常陸國鹿嶋

等神社正殿廿年一度改造其料使用神稅如無神稅即充正稅云々又日本逸史に云く嵯峨天皇弘仁三年辛

卯神祇官言住吉香取鹿嶋三神社隔廿個年皆改作積習爲常其弊不少今須除正殿外隨破修理永爲恒例許

之云々古は造營の用材に多く栗樹を用ゐ而して其材は之を那賀郡より採りしが貞觀中宮邊の開地に

栗樹及楮樹を植へ以て用材に充てんことを請願に及ばれたるが終に許可せられたり

三代實錄に清和天皇貞觀八年正月廿日先是鹿嶋大神宮惣六箇院廿年間一加修理所用材木五万余枝工
夫十六万九千四人料稻十八万二千余束採造宮之材之山在那賀郡去宮二百余里行路峻峻挽運多煩伏見

造宮材木多用栗樹此樹易栽亦早長宮邊閑地且栽栗樹五千七百株楮四萬株（今鹿嶋町に宇栗林と稱する地あり是蓋古へ栗樹を植ゑたる地ならん鹿嶋山ある所の森林は概ね杉樹にして大抵數百年以上の者なり）望請付神宮司命加植兼齊守太政官處分依請云々

往年は廿年毎に改造せられたるに中世に至り國司の修理する處となり且國司更代毎に之を改造せり
 明目記に文曆二年十月十五日鹿嶋社之習新任國司必造宮前司所置新司改任時必壞棄云々光顯法師下向之間社家見破壞彼新造社光顯存外周章云々降りて戰國の世に及びては國司の修理も行はれざると見へ大禰宜文書にも元弘二年已後戰爭に暇なく廿一年の先例を廢し纔に諸人の所願にて修理を加ふるのみにして年を歷ければ月日を追て大破せるを大禰宜憲親之を歎き永享六年鎌倉に訴ふ持氏因て發願あり是年宍戸安藝入道小高掃部助二人を國奉行として一國平均の段錢を以て造營すべきを命ぜらる是に於て二人諸方を催促すれども未進多くして事行はれず因て憲親又是を鎌倉に訴ふ云々

鹿嶋社例傳記に大永二壬申年當社御造營此時は天下より御造營にあらず御社大破によりて假御殿を造營す大宮司助久勸進狀を認め御手洗寺の住持に國中を廻らせ其金銀を以て造立するなり亂世の故なり云々武將にありては當神宮を造營せられたるは中世に於ては源賴朝（東鑑）近世に於ては徳川家康及秀忠の兩將軍なり（慶長御造營記 元和御造營記）現今は内務省に於て之が造修を擔任せり

奉幣使は往時は朝廷毎年二月の祈年祭に奉幣使を發遣せり其使は六位已下の藤原氏一人寮夫生一人竟幣夫二人なり（延喜式）當時幣帛の數其他宮司禰宜稅物忌及幣使に賜ふ所のもの詳に延喜式に見へたり

曰く鹿嶋社五色薄絶一丈安藝木綿廿枚盛裏料商布一段布綱三丈（一條長一丈二尺 二條各長五尺）明櫃二合調布二丈荷覆

二條禰宜絹一匹物忌夾纈帛淺綠帛各三丈（已上）紫纈帛三丈練帛六尺絹一匹綿二屯宮司當色一領禰宜稅

當色一領社雜給料絲二十約已上官物使等裝束藤原氏六位已下一人寮吏生二人覺幣夫二人使料當色一領夾

纈紅臘纈支子帛各一匹中綠帛二匹調綿廿七屯細布三反已上官物淺綠綾淺綠帛各一匹已上官物史生當色一領絹二

匹調綿六屯曝布二端寶幣夫別衫一領料紺調布二丈布帶一條長八尺以上上官物云々而して幣使發句の次第又同書

に見へたり曰く使等上道日餞料錢一貫文布其使名簿前二月春日祭廿日大臣以下當官寮差點史生申官

領叢備幣物其使等當日寶幣發寮向國云々此余天皇の即位皇后の新立大臣拜任の際にも亦奉幣使を發

遣せられたること大鏡に見へたり中世以降路程遙遠公私多費なるを以て常陸大椽氏に敕し其禮を攝

行せしむ常陸國誌爾來大椽氏の族馬場行方眞壁小栗吉田東條鹿嶋七郡の地頭等七年毎に輪番奉幣使とな

り毎年七月十日十一日の兩日を以て大祭を舉行せり明治の初め御軍祭は九月一日の夜に御船祭は

其翌日之を行ふことに定めらるる其祭事を國衙祭と云ひ其幣使は之を大使役と稱せり稅書文書新編國大使役記

誌詳に其由縁を記せり曰く鹿嶋宮毎年七月十日十一日の祭會は年中數十ケ度の祭事の内殊に大宮の

祭たるに依て往古は敕使下向して其事に預りしに中世公私費用多端にして國煩ひ民歎くの間敕使の

下向を止め大椽を以て之に代へ依て敕使に準し衣冠を着し四方輿に乗り神宮在廳等の座に列し祭事

を勤仕す是を大使役と云ふ又小使役あり是れ目たるものゝ所役なり馬場資幹の大祖國香大椽たるの

時この役に從へしことあり爾後子孫の内椽たるものは之を役す源賴朝霸業成るに及で資幹大椽に任

ま其官を世々にすることを許されてより大椽を始め其門族七郡の地頭等七ケ年に一度巡使として之

を勤む然れども支流の輩は大椽の官に任せざるを以て祭使勤仕の間は更に大椽に準據し假に大椽と

稱す云々後天正十八年に至り大椽氏亡び其明年鹿嶋行方の諸族悉く亡ぶるに及で其禮遂に絶てり明

治の革新に至り朝廷復祈年祭御船祭及新嘗祭に奉幣使を發遣し地方官をして之を攝行せしむ

常陸誌に東鑑を案するに是より先養和元年辛丑二月十二日源賴朝常陸國鹽濱大窪世谷等を奉り同年十月十二日又同國橘卿を奉り文治三年十月廿九日毎月の神膳料とて本國奥郡に於て粃百十石を充つ則ち多賀郡十二石五斗佐都東十四石佐都西九石八斗那珂東十三石九斗那賀西十九石四斗云々と而して世谷大窪等の地は蓋し賴朝の寄進せられたるものなるべし徳川氏に至り家康千五百石を増して二千石となす實に慶長七年十月廿二日なり

大宮司
文書 右は鹿嶋社に關する記録の梗槩に過ぎずと雖も其由緒を知るに於て幾分の補益なきにもあらざる可し尙は詳かなるに至ては別に書あり若し他日永陽の期清閑の折を得ば更に史家の示教を仰がんも未だ知るべからず

次に當社所藏の寶物二三を紹介して止まん

鞍骨一脊 源賴朝公奉納

本地梅竹の平蒔繪幅輪は銅と相見へ

居木は汚損せり

證二具

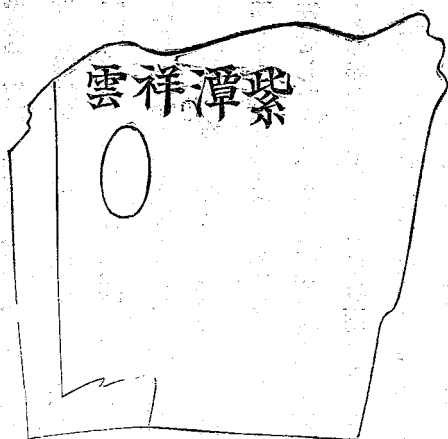
元和元年十一月當宮造替御遷宮の節

源家光公奉納

硯

石背銘

先考若狹之少將兼讚岐守源忠勝勤勞蒙洪恩賜若狹一國暨數郡余襲封其國郡實官家厚惠先考餘慶也若州土地膏腴所產數品紫色之硯鮮明堅緻方今命工彫刻爲硯而奉納



鹿嶋大明神社夫祝壽者也永傳千季祝國家繁榮也弘文院林子自先考相繼故譜之記其事

寛文六年丙午夏日

若狹國主從四位修理太夫源姓酒井忠威

人麿立像高一尺五寸五分

法橋清水宗茂奉納

右像ハ白河天皇の御代讃岐守藤原兼房朝臣柿本人麿朝臣を夢にみて畫工に書せけるもの 天皇
斯道に御心深く座々しかは彼影像を召ま勝光明院の寶藏に收めさせ給ひしを六條修理太夫顯季
朝臣乞申して寫取らせ日野大草頭敦光朝臣に贊を作らしめらる敦光朝臣彼畫像を木にて少まも
違はず彫刻またるを年歴て志那入道宗鑑に傳へ後傳へ々々て水戸故中納言頼房卿より畠山仙室
に給ひ又一松白道に贈らる夫より清水谷大納言殿の門人法橋清

御神璽

宅田 經一
分二寸

由神社記錄

光仁天皇寶龜九年戊午此神璽を納め玉ふ其後ち神官等職
を襲く時此神璽を押して文書を大官司より授くこれを任
符と稱す御改正前までの補任の例なりしといふ
此他太刀書畫記するに違あらず故に省く

